

小学校の体育授業における かけっこ指導法の改善に関する研究

トップスポーツマネジメントコース

5012A301-1 青戸慎司

担当指導教員：平田竹男教授

【1.序論】

小学生の走力は、1985年頃を境に、低下傾向にある。これは、運動する機会の減少という小学生の生活環境の変化に原因があるとされているが、自身が10年に渡り延べ60校でのかけっこ指導を行ってきた中で、小学校における走練習の環境にも原因があるのではないかということを感じてきた。

第一には、小学校で体育の授業を行う教員に、運動経験のない者が増えていること。第二には、教員が指導の指標とする学習指導要領・学習指導要領解説において走練習の解説が不十分であること。そして第三に、絶対的な指導書やマニュアルが存在せず教員自身が指導に苦慮しているという点が見受けられた。

指導書については、市町村によっては教育委員会から副読本が配布されているところもあるが、ほとんどにおいて、教員自身が、著者、出版年、専門性が多種多様な、市販のガイドブックや指導本・DVD等を購入し、各自で試行錯誤して指導に取り入れているというのが実状である。

以上のような小学校における体育指導現場の現状を目にし、運動・動作習得に最も有利とされる「ゴールデンエイジ」の時期に正しい走り方指導を受けていないのではという危機感を覚え、より一層現場の課題に即した指導法を考える必要性があるのではないかという問題意識を持った。

以上のことから、小学校でのかけっこ指導の現状と課題を明らかにし、その改善策の一つとして、小学校の教員のニーズに沿ったマニュアル作成について検証することを本研究の目的とする。

【2.手法】

研究手法①：小学校でのかけっこ指導の現状と課題を明らかにするため、全国の小学校教員にwebアンケート調査を行い、指導上の問題点、参考にしている資料についての満足度や問題点について分析した。

研究手法②：全国の小学生の保護者にwebアンケート調査を行い、子供を持つ親の、子供の走力への意識調査を行った。

研究手法③：現場指導書、学習指導要領準拠の指導書、市販されているガイドブック・DVDについて、内容、記述、表現の比較をし、その傾向を探った。

研究手法④：手法③の結果と、手法①で明らかになった小学校の指導現場の課題とを照らし合わせ、より現場のニーズに沿うと考えられる指導マニュアルを研究し、青戸式かけっこ指導マニュアルとして構築した。

研究手法⑤：T市小学校5年生25名を対象に、担任教員が手法④で作成した青戸式マニュアルを使用して指導を行い、指導前と指導後一週間の個人練習後の50m走のタイムを計測し、その効果を検証した。

研究手法⑥：手法⑤で指導を受けた小学生25名対

し、かけっこに対する意識や、青戸式マニュアルを用いた指導を受けてみてどう感じたかについてのアンケート調査を行い、受講する小学生のニーズについて検証した。

【3.結果】

研究手法①の結果：体育の授業で走り方について指導している時間は、3 コマ以下が約 70%を占めていた。「特にしていない」という回答も 17%存在し、指導時間がとれていない現状が明らかになった。

また、半数以上の教員が、自分の指導で児童の足が速くなっている実感を持たずにおり、その理由としては、指導時間が少ない、指導の仕方自体がわからないというものであった。

研究手法②の結果：保護者の意識としては、ほとんどの親が子供の足が速くなってほしいと思っている反面、陸上教室へ入れるまでの積極性は見られなかった。

研究手法③の結果：現存する市販の指導教材においては、一部を除き基本的には短距離走理論に準じて同様の指導がされていると言えるが、その表現方法が様々である。総じて専門性が高いと言え、陸上未経験者が理解するには難易度が高いことがわかった。

研究手法④の結果：研究手法①と研究手法③の結果を照らし合わせ、より小学校の体育授業現場に沿ったマニュアルとして、次の 5 項目をもって、青戸式かけっこ指導マニュアルとした。

1.姿勢 2.腕振り 3.早歩き 4.もも上げ(膝下ろし)

5.スタートダッシュ

尚、その具体的練習法の表現においては、未経験者の教員、受講する小学生の視点に立ち、具体性と平易さに注力した。

研究手法⑤の結果：タイムが速くなった児童は 25 名のうち 17 名であった。一方、タイムが変わらなかった、もしくは下がった児童は 8 名であった。また、全体のタイム平均は、0.3 秒向上した。

研究手法⑥の結果：かけっこが得意であると思っている児童は全体の 28%に留まる一方で、72%の児童が友達より速く走りたいと回答しており、意欲は十分にみられることがわかった。

【4.考察】

上記の結果から次の考察が得られた。

(1) 体育授業における走練習の課題としては、時間の少なさ、教員自身のかけっこ指導力への不安があり、そのことから、陸上未経験者でも理解できる内容で、短時間で指導できるマニュアルへのニーズが高い。「簡単」「短時間」「具体的」が重要テーマである。

(2) これまでの指導書においては、専門家の視点で「如何にしたら速く走れるか」という観点から表されてきたものがほとんどであり、特にその表現方法において、陸上未経験の小学校の教員が指導要領を如何にして達成していくかという、「小学校の体育授業現場のニーズに沿う」という観点が不足していると言える。

(3) 本研究で提示したマニュアルについては、「簡単」「短時間」「具体的」という小学校教員のニーズに沿うものであり、一定の効果も認められたことから、現存する指導書を更に噛み砕いた実践用マニュアルという位置づけで、利用価値があると考えるので、今後更に実験と検証を行うことにより、最終的には青戸式を完成させたい。

文部科学省の指導要領に沿うという制約がある体育の授業において、陸上未経験者の教員が効果的なかかけっこ指導を行うのは容易ではない。実践用マニュアルの提示は、あくまでもその解決法の一つに過ぎないが、今後陸上界が児童の走力強化に取り組む上で、小学校教員のニーズに沿うという視点を取り入れるきっかけになれば幸いである。

